

瀬戸内海倉橋の旅職人

さとうたくみ

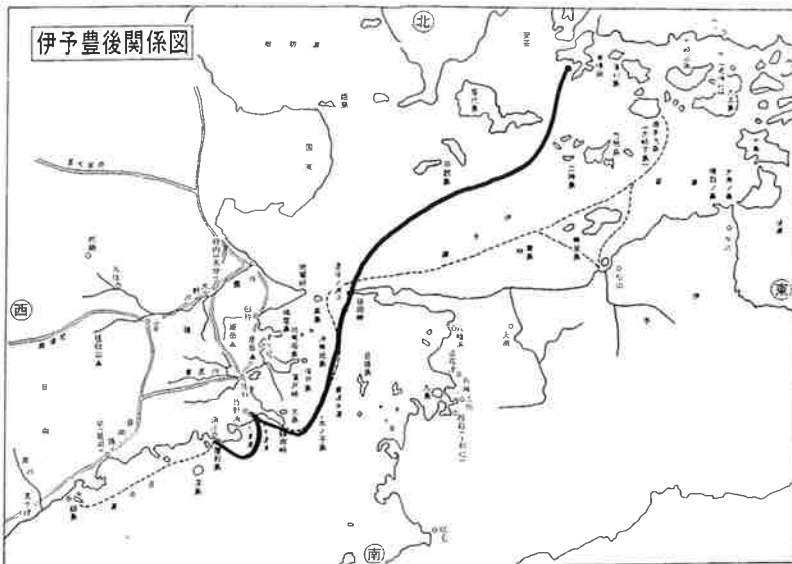
先年より倉橋職人のことが気に掛かっていましたが、佐伯史談会に送られて来る『月刊歴史手帳』の中に倉橋町史が編纂中であることを知り、早速問い合わせて見ました。

前略

大分県佐伯市より、突然お便り申し上げます。

私たちの町は豊後水道に臨む大分県の南部に位置しております。中世の頃は海部郡佐伯荘と呼ばれ、大神姓佐伯氏の治める所でした。近世には毛利氏二万石の領地となりましたが、上方へ往来の節は倉橋の港へお世話になったり、倉橋の人々との交流があったものと思われま

す。佐伯領の下浦と呼ばれた蒲江町にある王子神社の本殿は、この地方では希有な春日造りで、その装飾や彩色が華麗でみごとです。この正殿・拜殿ともに正徳三年（一七一三）の建築で、工匠は長州倉橋の住人で友沢吉右衛





春日造りの王子神社神殿

門政行 同嶋田与太夫などとなっており、総て組立式のセキ船造りと呼ばれています。(ふるさと蒲江浦資料集)
 蒲江浦大庄屋の手控帳の中に、倉橋から参じた旅職人の入職願いや運上銀上納についての記事が散見できるので、紹介します。(豊後国南海部郡蒲江町・屋形島関係史料集 佐藤正博・森猛編)

仕上ル旅家大工 木挽書上之事

府内桜町家大工

老人

善七

宿蒲江浦甚兵衛

倉橋木挽

老人

源八

宿右同浦安右衛門

右之家大工木挽、爰許江入職ニ参申候テ

相仕舞罷帰り申候。則、御定之御運上銀

上納仕候為、御断書上如件。

享保四年亥(一七一九)

十月十一日

進上此通三枚

弥太郎

御代官へ上ル

右は仕事を終えて運上銀を納め、帰国する者ですが、同日付けで越年を願ひ出た者は、次の二人です。

芸州倉橋船大工 吉右衛門

同 仁兵衛

奉願旅船大工木挽書上之事

芸州倉橋船大工

老人

平六

宿蒲江浦安右衛門

宗門一向倉橋得藏寺旦那

同国同所木挽

老人

源八

宿右同浦同人

宗門一向倉橋淨福寺旦那

右之旅船大工木挽、爰許江入職ニ參申候

則、倉橋庄屋幸右衛門手形、寺手形所持

仕申候。御定之御運上銀被為、迎付御札

被下候ハバ難有可奉存候。依書上如件。

蒲江浦組庄屋

享保五年（一七二〇）

御手洗弥太郎

二月 日

同浦肝煎

安兵へ

進上此通御代官江三枚上ル

右文書では、昨年帰国した木挽職の源八が船大工の平六を伴って再び入職を願ひ出ています。従って今年中に召置いた職人は越年の者を入れて次の四人となります。

享保五年二月六日付け

芸州倉橋船大工 吉右衛門

同 仁兵衛

同 平六

同木挽 源八

以上の職人が、仕事を終えて帰国したのは次の通りです。

享保五年七月十八日

吉右衛門 相仕舞国元へ罷登ル

同年 十一月 廿一日

平六 同右

同年 十二月 廿一日

源八 同右

仁兵衛 同右

資料は二年分しか無いので、これ以上のことは分かりませんが、おそらく倉橋職人の出稼ぎは継続していたと思われまます。

また同町西野浦や楠本には倉橋姓を名乗る家が合わせて十軒ほど在りますが、これらの御先祖は船大工として居着いたと言われています。

隣村の米水津では、文政十一年（一八二八）に養福寺の新築があり、その棟札に記された六十一名の大工木挽の中に、倉橋の職人五名の名前を見ることができます。

倉橋 政吉・仁太郎・由松・甚作・直蔵

この米水津村と先の蒲江浦の大庄屋はそれぞれ同族の御手洗氏が勤めて居り、この御手洗一族は応永年間（一三九四～）に瀬戸内海の御手洗島（大崎下島）より移住したと言われ、以来佐伯領の海防と海運に大きな影響力を發揮しています。（御手洗一而著『巴の鏡』）

以上ですが、倉橋職人に関する研究資料が有りましたら、送って頂けると幸いに存じます。

昭和六十三年七月三日

大分県佐伯市池船町四千ノ十一

佐伯史談会事務局 佐藤 巧



浦代の養福寺（棟梁・城下 吉田又四郎）

折り返し倉橋町教育委員会より連絡を頂き、町史編纂委員の方々が実地見聞のために来佐したい。との意向を伝えてきました。

八月二十四日、米水津村教育委員会・蒲江町教育委員
会のご協力を得て、佐伯史談会で案内することになりま
した。

来訪者四名

広島大学教官

佐竹 昭

案内人四名

清田義雄

県立井口高校教諭

菅信 博

佐藤 巧

倉橋町教育委員会

道岡尚生

河野 誠

同

井上角二

三宅徳和

まず米水津村浦代の養福寺を見学、蒲江町の王子神社
へ向かいました。途中の西野浦では、磯貝義彦氏が地元
倉橋家の調査をして、江戸時代に遡る船大工・船鍛冶の
系譜をご披露して頂きました。

一方、倉橋の史料として、享保五年の「松原村人家御
改帳」の中から、

亅人 歳廿九

平左衛門子

平九郎

右記の項に付箋をして「佐伯へ下り、もどり申さず候」
と書かれた文書の写しを頂き、倉橋を去った者があり、



- 左側の岬が長串の鼻
- 左側山裾の寺院は西蓮寺

- 右側社叢は春日神社
- 正面の寺院は浄福寺

また当地へ居着いた者があったことを、改めて確認した
思いでした。

広島県倉橋島は瀬戸内海の要衝にあり、古代から造船
が盛んで、中世の戦乱期には海賊衆として活躍しました。

近世には藩の被護を受けて、造船業を独占するようにな
りましたが、海運業の盛衰と共に浮沈を繰り返し、船
大工・棟梁たちのなりわいも、必ずしも平坦なものでは
なかったようです。

しかし活況期には、他国の雇われ大工や見習い大工で
島の人口が三倍にもなり、取引圏は瀬戸内海沿岸は勿論、
北は東海地方から西は彦岐・対島、南は九州薩摩まで注
文が殺到したそうで、豊後もよい取引相手であったこと
が、幕末の史料から分かります。

それにしても、倉橋の船大工たちが造船に限らず、社
寺建築にまで進出してきた事実は、かれらの技術力が買
われたものか、造船不況によるものなのか、いずれにし
ても、かれらが関わった当地の王子神社や養福寺は、旧
佐伯領内に残る名建築である。と言えます。



丸子山城跡から倉橋湾内をのぞむ